講演会
「パンチャタントラ－世界で最も古い子どものためのお話集」

平成 16 年 5 月 22 日（土）
国際児童図書評議会インド支部事務局長
マノラマ・ジャファ氏

皇后陛下、並びにここにお集まりの皆様。

最初に、この講演にお招き下さいました国立国会図書館の黒澤隆雄館長並びに国際子ども図書館の富田美樹子館長に厚くお礼申しあげます。また、お集まり下さいました皆様方の前で、そして今日は、皇后陛下のご臨席をいただいておりまして、ここでお話申し上げることができますことは、私にとりまして大変光栄でございます。

今日の講演の主題はパンチャタントラについてです。ご存知かと思いますが、パンチャタントラは世界最古の子ども向けの物語集です。そしてまた最初の動物物語集でもあります。パンチャタントラは長年にわたる時代の知恵の集大成ともいうべきもので、世界の文学に大きく貢献しています。パンチャタントラはもともとサンスクリット語で書かれていて、5 巻の本からなっています。全部で 84 のお話が入っており、お話の中にまた多くのお話が挿入されているという、いわゆる枠物語になっています。昔は、物語を飽きさせないように、このインド独特の枠物語の形式がよく使われていました。

パンチャタントラ第 1 巻は、「友人を失う」という題で 34 のお話が入っています。第 2 巻の題は「友人ができる」で 10 のお話、第 3 巻の題は「カラスとフクロウ」で 18 のお話、第 4 巻の題は「得たものを失う」で 12 のお話、第 5 巻の題は「浅はかな行い」で 10 のお話、5 巻全部で 84 の話がはいっています。

パンチャタントラを貫いている中心理念は、人間の調和のとれた健全な成長、つまり、いつまでも喜びをもって人生を送るには、どのように身の安全や繁栄や友情や学識などを結び合わせていけばよいかということです。パンチャタントラには、道徳的価値観や社会秩序や日常の規範が書いてありますが、また同時に、抵抗したり、異議を唱えたり、改革するにはどうすればよいかといった方法にもふれています。

パンチャタントラは道徳を教える物語集ではありません。それはニーティ、つまり生きてい

く上での知恵を教える物語です。対話を通して、異なった意見が述べられ、数々の格言が入っています。格言は頭脳を刺激し心をひきしめます。そして、愚か者であってはこの世に居場所はない、と教えてくれます。ある格言では、「詐欺師や愚か者には、近寄るな」といい、「学問は、優れた感性に劣る。だから知性を高めよ。」というのもあります。また次のような格言があります。
「知恵さえあれば、不可能なものはない。」
「賢者は、失った物、死んだ者、過ぎ去ったことを嘆き悲しまない。賢者と愚か者の違いはまさにそこにある。」
「成功したければ、活発でいなさい。」
「悪い行いは悪をよぶ。賢人は、悪に心を向けない。どんなに喉が渇いても、道路にできた水溜りの水を飲んだりはしない。」
「友達は 6 つのことをしてくれる。貰ったり、また与えたり、耳を傾けて聞いたり、話をしたり、食事をしたり、楽しく過ごすこと。」

パンチャタントラはまた、古代から語りつがれた伝承の一つであり、そのはじまりはインド文明の曙の時代へ遡ります。何世紀にもわたって語り伝えられるうちに、話の内容も変化しています。この物語は最初サンスクリット語で書かれましたが、いつ誰が書いたかは、はっきりとは分っていません。インドだけでも、25 の異なった伝本が残っています。いくつかの伝本に作者としてヴィシュヌ・シャルマーという名前がみられますので、彼が最初の編者だということになっています。言い伝えによると、

ヴィシュヌ・シャルマーという人が
世間の知恵の真髄を
全てじっくり拾い集め
5 巻の本を書きました。
世界の素晴らしい物語が
みんなまとめてはいっています。

パンチャタントラがどのようにして作られたかということが、一つの興味深いお話になっています。そのお話は次のとおりです。

何千年も前にインドに一人の王様が住んでいました。王様には、3 人の愚かな息子がいました。王様はこの 3 人に幸せな人生を送ってもらいたいと考えていました。また、「愚か者は幸せにはなれない。」という事も知っていました。

ある日、王様は大臣を呼んでいいました、「どうか、わたしの三人の王子が賢くなれる方法

を教えてくれないか？」すると、一人の大臣が立ち上がっていいました。「王様、私は有名な先生を知っています。ヴィシュヌ・シャルマーという方で、年は 80 歳のお年寄りです。この先生なら、王子さまたちを賢い若者に教育して差し上げることができるでしょう。」

王様はヴィシュヌ・シャルマーを宮廷に招きました。ヴィシュヌ・シャルマーが宮廷につくと、王様はこうお願いしました。「偉大なる先生、どうか私の息子たちが立派な人生を送れるように導いてください。お礼に、私はあなたがお望みのものを何でも差し上げます。」

ヴィシュヌ・シャルマーは誇り高き老教師でした。彼はこれを大切な仕事と受けとめ、王様にこう申し上げました。「ああ王様、私は今日ここに、王子様たちを 6 ヶ月以内に賢く物分りのよい人間になっていただけるようにお教えすることを誓います。お礼は何もいりません。今すぐ王子さまたちを私のところに寄越してください。」

王様は王子たちを呼びにやり、王子たちは、ヴィシュヌ・シャルマー先生の庵にやってきました。ヴィシュヌ・シャルマーは王子たちと一緒に暮して、毎日、格言が入ったお話を語って教育しました。6 ヶ月が過ぎて、ヴィシュヌ・シャルマーは王子たちを宮殿に連れて行きました。王様は、王子たちが世の中の実際に役立つ知恵を身につけた人物になっていることを知って、たいそうお喜びになり、ヴィシュヌ・シャルマーにおききになりました。「先生は、いったいどんなことをなさったのですか？」すると、この大先生は笑みを浮かべてこう答えました。「私は王子様に幾つかお話をしただけです。」

王様はヴィシュヌ・シャルマーにお礼をいいましたが、勿論ヴィシュヌ・シャルマーはお礼の贈り物を一切受け取りませんでした。それからというもの、王様の 3 人の王子たちは、幸せな生活を送ったということです。この話の終わりにはこんな格言が述べられています。
（チャンドラ・ラージャンによるサンスクリット原典からの英訳）

この本を読む人はだれでも
この物語に耳を傾ける人はだれでも
敗北を喫することはないだろう
神様からの挑戦であったとしても。

古代インドでは、作家や絵を描く人など創作に携る人は、自分の名前をふせて仕事をする心構えが大切だと考えていました。その人たちの創作活動は、すべて大目的を達成するために身を捧げることであって、何ら個人的名誉を求めることではなかったのです。最も大切だと思っている目的のためだけに心身を投げ打つことでした。インド最古の聖典であるヴェーダでも、多くのお祈りの歌の最後は次のサンスクリットの 3 つの言葉で終わっています。“ イダン　ナ

マム ” つまり「それは私のものではない」という意味の言葉です。

　ところで、パンチャタントラがどのようにインドから外に広まっていったかということについて、面白いお話があります。6 世紀の頃、今のイランであるペルシャに、ある王様がおりました。名前はアヌシルバンといい、ギリシャ人やインド人やペルシャ人の医者を 25 人も抱えていました。中でもお気に入りはブルゾーエという医者でした。ブルゾーエは、死んだ人を生き返らせるサンジーヴァニーという薬草があると聞いたことがありました。この薬草はインドの山の中だけにしか生えていないということもわかりました。ブルゾーエは王様に、この薬草を探しに行かせて欲しいと願いでました。王様は大喜びで、自分の友人であるインドの王様に紹介状を書いてやりました。この紹介状をもって、ブルゾーエはインドへ行き、インドの王様に面会しました。

　インドの王様は、ブルゾーエを歓迎して、なんでも手助けしようと申し出てくれました。ブルゾーエはこのサンジーヴァニーという薬草を探しに出かけました。まずヒマラヤの山や谷に入って探し、人々にも聞いてみましたが、薬草はみつかりません。がっかりしたブルゾーエがもう諦めてペルシャの国に帰ろうかと思っていたとき、一人の年老いた賢者に出会いました。その賢者はブルゾーエの話をきいて、笑みを浮かべてこういいました。

　「ブルゾーエというお方、あなたは古くから伝わるこのたとえ話をご存知ないようじゃな。一つ聞かせてあげよう。山というのは賢者のことで、死人というのは無知な人のことじゃ。だから、山で死人が薬草でよみがえるというのは、賢者が愚者を格言によって教育するということで、死者をよみがえらせる薬草とは、つまり賢者が教える格言のことなのじゃ。この格言はパンチャタントラという本の中に書いてある。この本は王様の宝物になっている。だから王様の所に行ってこの本を読み、本当の薬草つまり格言を探すといい。」

　ブルゾーエはインドの王様の所に帰っていき、その本を見せて欲しいと頼みました。王様は大切な本なので渋々ではありましたが、自分の目の前でだけなら読んでも良いという条件付で許可を与えました。ブルゾーエは毎日王様の所にいってはその本を読んで記憶し、家に帰って覚えていることを書きとめました。そして、とうとう本を全部書き写しました。

　ブルゾーエは大満足でした。書き写したパンチャタントラの本をペルシャに持ちかえって、アヌシルバン王の所に行きました。王様はパンチャタントラを見て大変お喜びになり、ブルゾーエに「欲しいものはないか？」とお尋ねになりました。するとブルゾーエは、「王様、何もいただかなくて結構です。ただ、私のことについて書いた 1 章をこの本の中に加えていただけないでしょうか？」といいました。王様はこれを承知しました。

このようにパンチャタントラはペルシャに渡り、パーラヴィー語に翻訳されました。ブルゾーエの旅の話も書き加えられました。このパーラヴィー語版はペルシャの王様たちによって厳重に保管されていましたが、ついにイブン・ウル・ムカファによってアラビア語に訳され、ルダキという人がアミール・ナスール・イブン・アフマドの命令で、ペルシャ語の韻文に書き換えました。

イブン・ウル・ムカファはこういっています。「ペルシャ人がこの本をインドの言葉からパーラヴィー語に訳したと聞いたが、イラクやシリアやヘジャズ（アラビア半島にあった旧王国）の人々もこの本の恩恵を受けてもよいではないか。だから彼らの言葉であるアラビア語に訳したのだ。」と。

パンチャタントラは、紀元 550 年に『カルタカとダマナク』というタイトルでパーラヴィー語に訳されました。570 年にはブダ・アブダル･イヌ によって旧シリア語に訳され、750 年には『カリラ・ワ・ディムナ』のタイトルでイブン・ウル・ムカファが、アラビア語に訳しました。ブルゾーエの原本は失われていますが、失われる前に、ルダキが 940 年にペルシャ語に翻訳していました。

今日では、世界各国から 90 の原本の写本を入手できます。さらに、200 以上の言語に翻訳或いは翻案されて世界に広まっています。

パンチャタントラの話は、日本や中国や東南アジアの国々には、ブッダの前世を語ったジャータカから伝わっていきました。ジャータカには 546 のお話があります。例えば、パンチャタントラ第 2 巻にある「飛び立つハトの群れ」はサメダナム・ジャータカとしてジャータカの 33 番目に入っています。パンチャタントラ第 1 巻の「ツルとカニ」（注 1）は、38 番目にバク・ジャータカとして、パンチャタントラ第 1 巻の「間抜けなサル」は、46 番目にアルマドーシャカ・ジャータカとして、第 3 巻の「トラの皮を着たロバ」は 189 番目にシムハカマン・ジャータカとして、第 3 巻の「聖人の娘の結婚」（注 2）は 200 番目にサドウシラ・ジャータカとして入っています。最も良く知られている「サルとワニ」（注 3）はパンチャタントラ 4 巻にあり、スムラ・ジャータカとして 208 番に入っています。ここには　僅かの例しかとりあげませんでしたが、更に多くのパンチャタントラと同じ話がいろいろなジャータカの中にみられます。

イソップ寓話にもまたパンチャタントラと似た寓話があります。イソップの「ライオンとネズミ」はパンチャタントラの「ゾウとネズミ」に似ており、パンチャタントラの「ライオンとウサギ」はイソップの「ジャッカルとハト」に影響を与えています。

フランスではラ・フォンテーヌが自分の寓話集の中にいくつかパンチャタントラ物語を取り入れています。イギリスではエドワード・デニソンが、インドのソーマデーヴァ作カター・サリット・サーガラの英語訳である『お話の海』第 5 巻の序文でこう書いています。「『お話の海』のこの巻にはソーマデーヴァ版のパンチャタントラの有名なお話がはいっています。（ここで補足しますと）、中世のヨーロッパではパンチャタントラは『ビドパイの寓話』とよばれていまして、このビドパイという名前は、パンチャタントラのアラビア語の訳本であるイブン・ウル･ムカファの『カリラ・ワ・ディムナ』という本にはじめて出てきます。またそのアラビア語版の幾つかの翻訳や現代ペルシャ文学に見られる翻案などから考えますと、パンチャタントラはアラビア語版が母体になって、そこからヨーロッパに広まっていったと考えられるでしょう。」

パンチャタントラ物語がさまざまな国で翻訳されるにつれて変化した部分も多くあります。「猿とワニ」の話はペルシャ語で書かれた時にはワニがカメに変っています。このことは、今回ここに展示してある 1354 年の絵にみられます。

パンチャタントラの最も大きな特徴は、この物語が全ての年代の人々に受け入れられるということです。さらにパンチャタントラの話にはしっかりとした筋があり、ユーモアがあり、語りに適しています。そして、どの話がどの年齢の人に喜ばれるか分けることも出来ます。例えば、「おしゃべりカメ」は幼い子どもたちが喜び、もう少し年上の子どもや 10 代の人には、世間的な知恵を扱った話が受けます。大人は、現実世界に起きる状況をちりばめた風刺を好みます。鳥や獣が言葉をしゃべる話では、読者は登場する動物と自分を重ね合わせて楽しんでいます。こうした永遠の価値を持つ物語は、決して時代遅れになることはありませんし、老いも若きも同じように魅了します。

パンチャタントラを研究している学者がそれぞれ論文をまとめています。例えば、長年にわたり研究を続けているヨハネス・ヘルテル博士は、1914 年に書いた『パンチャタントラ』という本の序文の中で「パンチャタントラは、発祥の地インドから世界の文明国のすみずみにまで、比類のないほど普及し浸透しています。何千年にもわたり、老いも若きも、教養のある人も教養のない人も、金持ちも貧乏人も、上流階級の人も下層階級の人もみんなを喜ばせてきましたし、現在も人々はこの物語を楽しんでいます。言語、習慣、宗教といった大きな壁を乗り越えて、この物語は広まっていきました。」と述べています。

研究者のアーネスト・ライスはこういっています。「動物が主人公の寓話はイソップやギリシャではじまったものではないことを認めざるをえません。その寓話がどれほど古いものであるかを知るには、東の方、つまりインドに目をむけて、この枠物語をじっくり調べる必要があります。」

イギリスの学者であるフランクリン・エジャートンは彼の著書『新編パンチャタントラ』（1924）の中で、「すべてのインド文学の中で世界に最も大きな影響を与えたのはパンチャタントラのほかにない。聖書をのぞいて、インドの寓話集パンチャタントラほど世界中に広まった本はない。」と述べています。

アメリカの東洋学者であるアーサー・W・ライダーは サンスクリットから『パンチャタントラ』（1949）を訳していますが、その序文でこのように書いています。
「文明の夜明けの時から、人間が自分自身を知りたいというやむにやまれぬ欲求を持ちはじめて以来、その自己認識によって、友達を作り、仲間におとらぬ幸福と安らぎを得られるように人々に働きかけるには、パンチャタントラ物語は、必ずや役に立ち、力強い支えとなる。いつの時でも、パンチャタントラの最終目的は、男にも女にも子どもにも、人生をより豊かに幸せにする基本的な知識と知恵を伝えることである。インドから国外へとはてしなく広まっていく間に、話の型や色合いや背景ばかりでなく、全体のお話の数も変ってきている。」

ライダーはサンスクリット語から翻訳する時、登場する役柄の特徴をつかみ、それに見合った名前をつけるなど、読者がもとのテキストの雰囲気を味わえるように、ひとひねりした翻訳をしています。

もう一人、ウィニッタネッツ博士は、「われわれはみな、寓話を生んだインドの恩恵を受けているといっても過言ではない。そしてインドの文学の中で、パンチャタントラほど長く変化にとんだ歴史を持つ文学は他に見当たらない。」といっています。

ジョセフ・ゲラは研究者であり学者ですが、「インド人は世界で最初のそして最高の寓話の作り手である。」といっています。

世界中の多くの主要な博物館にパンチャタントラの原書や原画がおいてあることは、いかにこの物語集の人気が高いかを物語っています。中央アジアでは物語からとった題材が、壁画や、石のレリーフや立派な陶器の模様になっているところがあります。また、インドの多くの寺院にも、壁や天井にパンチャタントラの題材からとった絵が描かれています。あの有名なインドのアジャンターの石窟の中にも「おしゃべりかめ」からとった、2 羽のガンが、棒を口にくわえたカメを運んで空を飛んでいる絵が描かれているのを、私は見たことがあります。

パンチャタントラはインドのバニヤンの木に例えられます。それは一年中青々と葉を茂らせ、枝を広げ、根を張っていきます。枝から空中に伸びた根がいったん地面に届くと、そこから新しい木が生えてきます。バニヤンは人々の雨よけや日よけの場所となり果実を与えてくれます。

このパンチャタントラという樹は世界のはるか遠くまで枝を広げていますが、もとになる樹は今も母国インドの地にしっかり根をおろしています。パンチャタントラの話を読む人も聞く人も、誰でも楽しくなってしまうのです。

以上で私の話を終わりますが、大昔からのインドと日本の関係が、バニヤンの樹の根のように、ずっと深くあり続けることを願ってやみません。

最後にもう一度この講演にお招き下さいました国立国会図書館の黒澤隆雄館長並びに国際子ども図書館の富田美樹子館長にお礼申し上げたいと思います。またこの講演を日本語に翻訳してくださった鈴木千歳氏にもお礼申し上げます。

そして、皇后陛下のご臨席をたまわりましたことを、誠に光栄に思っております。本日は本当にありがとうございました。
（日本語で）「アリガトウゴザイマシタ」

ここで一つお知らせします。今回の展示に含まれています私個人のコレクションを、国際子ども図書館に寄贈したいと思います。皆様がこのささやかな贈り物を受け取って下されば幸いです。

（日本語訳　鈴木千歳）

異なる名前で知られる日本の民話名
注 1「サギとカニ」、注 2「ネズミの嫁入り」、注 3「サルの生き胆」「クラゲ骨なし」
注「パンチャタントラ」のパンチャの意味は数字の 5、よって 5 巻の教訓物語。